

総合文化研究所 Workshop Series 第四回

「ロシアのポストモダニズムとナシヨナリズム…V・ペレーヴィンの作品分析から」

報告 笹山啓

報告者が研究の主題とするV・ペレーヴィン(一九六二年)は、ソ連崩壊直後に発表した短編集『青い灯影』(一九九一年)や長編『オモン・ラー』(一九九二年)、そして代表作『チャパーエフと空虚』(一九九六年)などの成功によって、一九九〇年代ロシアのポストモダニズム文学を牽引した作家の一人に数えられる人物である。しかし、現代ロシアの批評的言説にある程度触れば分かることであるが、ロシア研究における「ポストモダニズム」という概念の取り扱いには固有の困難がつきまとう。それはロシアでこの概念が、あらゆる価値の相対化を目標とむニヒリズム思想として過度に否定的な役割を担わされたり、あるいは右派的な思想家によって、西欧近代の進歩的歴史観を否定しロシアの伝統的価値観を称揚するための材料として用いられたり、使用者によってその意味するところに大きな振幅が見られるからである。こうした経緯から、「ペレーヴィン」はポストモダニズムの作家」とするだけの説明はもはや十分な結果を生まない。

ペレーヴィンの思想的立ち位置をより精確に描出するため本発表ではまず、ペレーヴィンと同じくポストモダニズムに立脚する人物と見なされつつも、ペレーヴィンとは正反対の国家主義的思想を唱道するにいたった哲学者A・ドゥーギン(一九六二

年)の解説を経由したのち、奇しくも同年齢の両者の対照的な歩みを、ペレーヴィンによるドゥーギン批判を視野に入れ比較するという手法をとった。ドゥーギンの「ネオ・ユーラシア主義」は、単純化されたポストモダニズム的相対主義と、ゲノン、エヴォラのいわゆる「伝統主義」、ハウスホーファーの地政学、ハイデガー、そしてソ連の神秘主義作家マムレーエフの形而上学が混ぜ合わされた国家主義思想である。そこでドゥーギンは、個々の国々を持つローカルな伝統が再現された「プレモダン」的世界への回帰を提唱し、ポストモダニズムを欧米型リベラリズムに対する逆襲の理念として自覚的に利用している。

そもそもロシアのポストモダニズムを代表する幾人かの論者たちは、西欧に対する否定性(それは「空虚」「周縁」「他者」といった用語で表される)をロシア固有の特徴として措置してきたのだが、結局こうした理論は、ロシアの特殊性を裏返しのナルシズムによって強調する結果に逢着することが稀ではない。ネオ・ユーラシア主義はロシアのこうした思想的傾向が生んだ必然的帰結といえる。報告者はここにロシアのポストモダニズムがあまりこんだ陥穽を見、それを避けるべく徹底した個人主義的態度を取るペレーヴィンを評価する立場を取る。二〇〇八年



の短編「ネクロマンサー」でペレーヴィンは明示的にドゥーギンを批判したが、一九九〇年代作品でもすでにペレーヴィンの反国家主義的姿勢は際立っており、それはたとえば、ソ連という国家や共産主義イデオロギーの無根拠さをあらわすため、とりわけその時期に多用された「夢」や「睡眠」のモチーフが登場する作品群を分析することによって明らかになる。

ペレーヴィンの反国家志向、そして個人の自由を称揚する態度は、ロシアの特に大都市圏の住民が謳歌する消費主義社会とは相性がよく、彼の大衆的な人気を下支えする一因でもあるだろう。一方でペレーヴィンは、近年の反プーチンデモやアーティストによる反体制パフォーマンスには冷笑的な姿勢を崩さず、彼の描く「反抗」はそうした政治運動とは位相を異にすることが分かる。共産主義か資本主義か、保守かりベラルか、体制順応的か反体制的かにかかわらず、集団への同化、奉仕を要求するイデオロギーは彼にとり不要であり、あらゆる思想が国家との距離によって測られるロシアにあつて、ペレーヴィンの個人主義的な態度は十分な批判力を現在も保っている。

発表日 二〇一七年五月十五日 (月)